

2022年第1回定例会 一般会計予算 反対討論

議案第 17 号令和 4 年度調布市一般会計予算に対して生活者ネットワークは反対の立場から討論いたします。令和 4 年度の一般会計予算額は、歳入・歳出総額 952 億 7000 万円余で、前年度比 51 億 5000 万円余の増加、過去最高額です。個人市民税や法人税、固定資産税の増加や、地方消費税交付金の増などの要素もあり、コロナ前よりも増額となっています。

虐待への対策強化や相談支援の拡充、またアウトリーチ型の支援の新設など 2 年が経過するコロナ禍で深刻化する課題を捉えた各予算に異論はありません。

時間制限がありますので、最大の反対理由である調布駅前の公共施設の整備関連予算、特に総合福祉センターの移転を含む整備関連予算に絞って述べます。利用者不在の移転の検討からその後の進め方には、共生社会への理解や弱者への寄り添いの姿勢、市民参画によるまちづくりへの取組みが不足している今の調布市政の姿がそのまま表れていると言わざるを得ません。

2019 年 11 月末にセンターの移転について情報提供を受けた時から、私は懸念を訴えてきました。利用者からも不安や反対の声が聞かれたため、2 年前、2020 年第一回定例会以来、3 度の基本的施策に対する質問と一般質問でくり返し疑問を呈し、再検討を求めてきました。

市から初めて説明を受けた利用者は、センターが調布の福祉のシンボルとして、また利便性やアクセシビリティの面からも調布駅前にあり続けることが重要だと反対を伝えました。また検討委員会では「諸条件がクリアできなければ白紙に戻すべき」との見解も示されましたが、市は移転へと動き出しました。

3 回の検討会が終わって 2021 年度に入り、バリアフリー基本構想策定に伴い、新たにバリアフリー重点整備地区に定める京王多摩川駅周辺地域のまちあるきを行い、職員の間でも京王多摩川の駅舎や駅周辺のバリアフリー化が遅れていることが明確に認識されました。しかし、課題の多い駅舎のバリアフリー化を事業者の判断に委ねるしかない現状は変わり

ません。

昨年の調布っ子夢発表会で、多摩川地域に住んでいる小学校5年生が共生社会の実現を訴え、街のバリアフリー化を求めました。そのきっかけは、身体に障がいがある親戚の存在と、京王多摩川駅でホームと電車の際間に挟まって落ちかけた自身の経験でした。先日の京王多摩川駅周辺地区のまちづくり懇談会では、地元の方々が駅舎の危険性や階段が多くて大変な状況を訴え、センター利用者は大丈夫なのかと気づかう声が聞かれました。センターの移転について、一体誰の意見を聞いてその方向性を決めてきたのでしょうか。

総務委員会でも指摘がありましたが、京王電鉄との協定締結はまだこれからという理由で、市民にも利用者にも内容は何も示されていません。移転する機能と調布駅前に残す機能についても、これから新しい検討会で決めていくところです。当然、建物の詳細も示されていませんが、予算には事業者を支払う内装設計費 6000 万円弱が計上されています。一体誰の税金で誰のための施設を作ろうとしているのか、理解に苦しみます。

共生社会のビジョンは、日々その実現を願い心の中に描いている障がいのある人たちが一番よく知っています。市長は 2022 年度の重点プロジェクトの一つに「高齢者・障がい者にやさしい誰もが安心して住み続けられるまち」を位置づけました。それならば、今一度利用者の声に真摯に耳を傾けて、センター移転は白紙に戻し、グリーンホール整備と合わせて駅前広場の公共施設のあり方を多様な市民の参画で練り上げるべきです。以上、市民不在、利用者不在の調布駅前公共施設整備に反対の立場から、令和 4 年度一般会計予算に対して反対の討論といたします。